

ぐんまで頑張る職業人の熱意をレポート!

# 柴崎龍吾の課外授業

Vol.34

うすい学園代表取締役の柴崎龍吾が街に飛び出して、元気に働く人にインタビュー。子どもたちのために、職業の多様性や働くことの意味を毎号レポートしていきます!



エフエム群馬にてインタビュー内容を放送中! 毎週月曜 ワイド番組「ユウガチャ!」内 16:41頃~



うすい学園代表取締役 柴崎龍吾  
大学在学中に劇団を主宰し、卒業後は放送作家として活動。1975年に個人塾「横川学習塾」を開校し、以降、うすい学園を展開。子育てや教育に関する著書多数、ラジオ番組出演中。

## 本気の大人たちの背中を見て 自分自身の生きる道を決めた

柴崎 今回の高崎にあるミニシアター、シネマテークたかさぎの志尾睦子さんにお話を伺います。現在は総支配人ということですが、志尾さんと映画との関わりは、いつ頃からなのでしょう。

志尾 今でこそ、シネマテークたかさぎ総支配人や高崎映画祭のプロデューサーなどをしてはいますが、実は20歳の頃まで、映画に興味はなかったんです。

柴崎 それは意外ですね。どんなきっかけがあったのでしょうか。

志尾 大学生時代はなかなか夢が見つからなくて、悶々とした毎日を送っていました。あまり外出もしないで家にいる私に向かって友達が、暇つぶしに映画でも見たらと勧めてくれたのが、映画と触れ

合うようになったきっかけなんです。ただ、本当にその頃は暇つぶしとして映画を見ていただけで、深く興味を持つほどではありませんでした。

柴崎 志尾さんの人生と映画が交差したのは、どこだったのでしょうか。

志尾 学生時代に手伝いを始めた高崎映画祭です。友人からボランティアに誘われて、断り切れなかったので参加しました。最初は映画フリークの人たちの話についていけず居心地も悪かったのですが、そのうち、ついていきたいと思うようになってしまった。それが契機でしたね。

柴崎 その後、シネマテークたかさぎの開館と同時に支配人になったわけですが、経緯を教えてください。



今月の職業人

シネマテークたかさぎ 総支配人 志尾睦子さん



▲高崎市出身。群馬県立女子大在学中にボランティアで関わって以来、高崎映画祭に携わり続ける。シネマテークたかさぎ総支配人、高崎映画祭プロデューサーの他、高崎電気館、高崎フィルムコミッション運営にも関わる  
◀ミニシアターは敷居が高いとよく言われるが、それも魅力のひとつ。何かが心に残るような、人生の2時間を過ごしてほしいと笑顔で話す

志尾 高崎映画祭を立ち上げ、シネマテークたかさぎの初代総支配人になった故・茂木正男さんは、私に支配人をやってほしいとはひと言も言いませんでした。それは、何の保証もできないからです。でも、当時私は27歳ぐらいで一番のお姉さん、高崎映画祭でも中心的な役割をやらせていただいたので、自分からやりますと言いました。

柴崎 不安はありませんでしたか?

志尾 高崎映画祭に関わって、本気でやっていた大人たちを見てきました。地方にいながら、東京や世界とつながる大人たち。一般人なのに、その世界では有名な人々と一緒に、例えいばらの道が待っているようにも、楽しく乗り越えていけると思っただけです。

柴崎 シネマテークたかさぎの役割は何かと考えていますか?

志尾 東京まで出ないと見られない映画を上映するというのももちろんですが、地域の情報発信や人々の集まる場所として、商業と文化が混じった場所、コミュニケーションシネマでありたいと思っています。

柴崎 今後はシネマテークたかさぎをどうしていきたいですか?

志尾 映画を通してまちを活性化させる、そのモデルケースになるという意識は常に持っています。これは喜びであり、使命ですね。今後はもっと地域と連携して、地域と映画の関係性を深めるなど、進化を止めずに歩み続けたいと思っています。柴崎 心が動く、何かが残るというのを意識して、自信を持って勧められる作品を上映すると話す志尾さん。ぜひ多くの人にミニシアターに出かけて、人生が豊かな時間を過ごしてほしいですね。それではまた次回!

